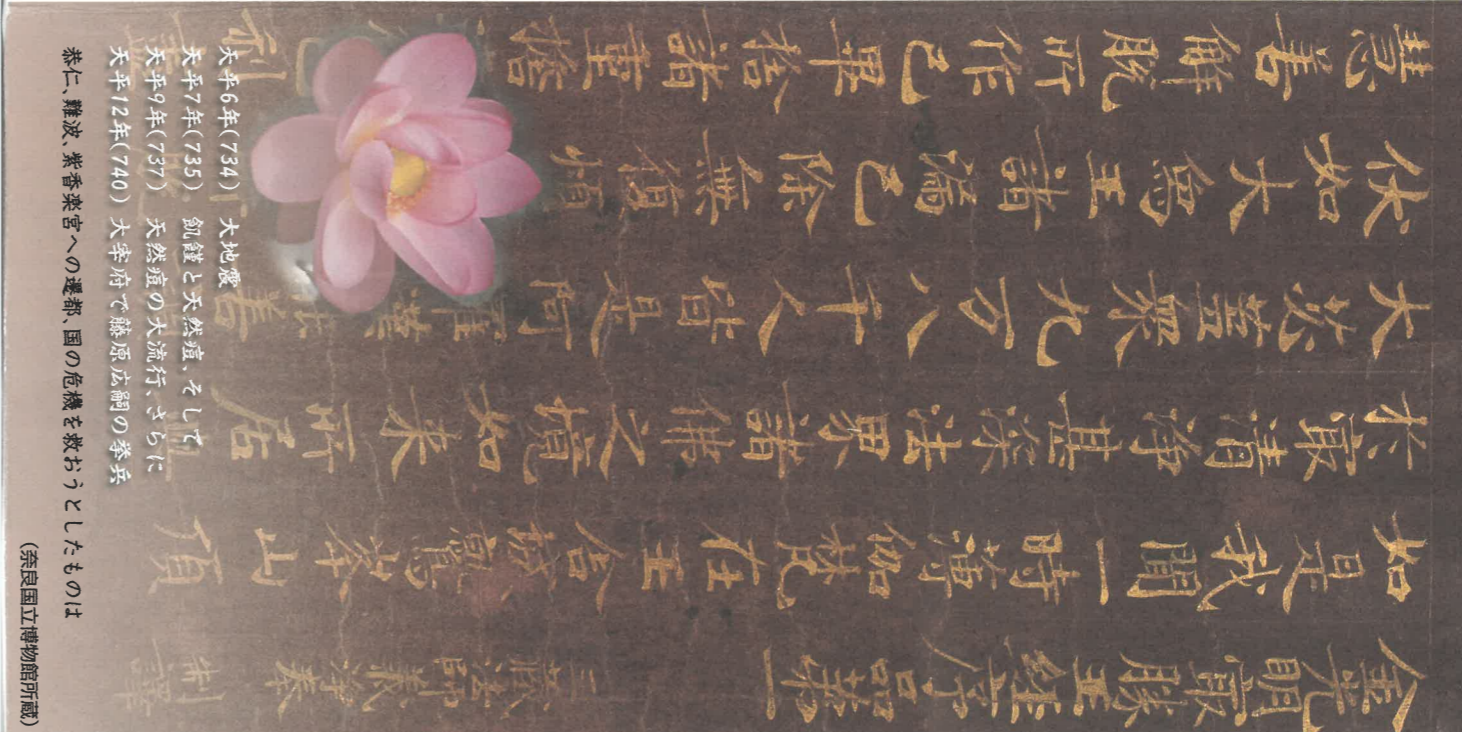


史跡陸奥国分寺・国分尼寺跡

仙台市文化財（ボランティア）第62集



大正11年(1922)に国史跡に指定されましたが、本格的な発掘調査は昭和30年(1955)から34年(1959)までの5か年にわたり実施されました。また昭和47年(1972)以降は、仙台市教育委員会によって継続的に発掘調査が行われ、大規模な寺院跡であったことが明らかになりました。

発行／仙台市教育委員会 文化財課 ☎022-214-8893
発行日／平成 22 年 3 月（平成 30 年 3 月一部改定）

（奈良国立博物館所蔵）

金堂跡

高さ90cmの基壇の周囲（東西31.7m、南北19.85m）に凝灰岩の切石を立て並べ、東西24.65m、南北13.06mの東西に長い礎石建ち建物で、廻廊が取り付いています。礎石は1個のみ残っています。失われていた礎石があらたに設置され、そこから延びる廻廊が表示されています。



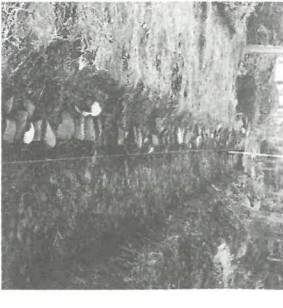
講堂跡

現在の薬師堂と重なる位置にあります。実際に講堂の建物の跡を見ることは出来ません。礎石建ちで、高さ60cmの基壇の上に建っていたようです。講堂は多くの僧侶が中に入り講義などが行われるため、金堂より大きく造られます。



僧房跡

講堂の北端から約11.7m離れ、現在は杉林となっているあたりに僧房が建っていました。小さな部屋に分かれていた可能性があり、いわゆる寄宿舍のような使われ方をしていたと考えられます。講堂とつながった廊下（軒廊）が取り付いています。



塔跡

高さ1.2mの基壇の上に屋根の初層が一辺10m、高さか57m程の七重塔が建っていました。承平4年(934)に落雷により焼失したことが「日本記略」に記されています。それを裏付けるように、塔上部の相輪の擦管が塔跡北側で逆さまに突き刺さって発見されました。これらの陸奥国分寺が造られたのは、天平13年(741)以降のおよそ750年代ではないかと考えられています。



（生ノクワの写真は昭和36年発行「陸奥国分寺跡」発掘調査報告書より）

時代	西暦	年号	おもなできごと	陸奥国のできごと
	645	大化元	大化改新。東国に国司を派遣する。	この頃、陸奥国がおかれる。郡山遺跡 1期宮帯つく5れる。

飛鳥	685	天武19	諸国の家ごとに仏舎を造り、仏像、経を置く。	
	694	(持統8)	藤原京へ遷都、金光明経を諸国に置く。	この頃、郡山遺跡 II 期宮帯つく5れる。
	710	和銅3	平城京へ遷都	
	718	養老2	遣唐使が新羅の金光明最勝王経をもたらしす。	陸奥国から石城、石帯の二国を分置する。
	724	神元元	天然痘が大流行する。藤原四兄弟没	多賀城をおく。
	737	天平9	国ごとに法華經一〇部を写し、七量器を遣わせる。藤原広純の乱	
	740	天平12	国分寺建立の詔を發布する。	
	741	天平13	諸国に国分寺の僧尼を選定させる。	
	742	天平14	慮舎那大仏造立を発願する。	
	743	天平15	国ごと正税四万束を割き、毎年出家して国分寺造立の費用とする。	
	744	天平16	国分寺の用地を定め、造営に務めさせる。実力のある郡司に建設を担わせる。	
	747	天平19	この頃、国分寺建設の資材や費用を献納した豪族に位か与えられる。国分寺造営が本格化する。	小田郡よりはじめて黄金を買する。

奈良	749	天平勝宝元	豊武大上天皇崩御、使いを諸国に遣わし、国分寺の丈六仏像の造営を促す。	この頃までに陸奥国分寺、国分尼寺造られる。
	752	天平勝宝4	東大寺大仏開眼供養	
	756	天平勝宝8		
	759	天平宝字3	国分二寺の図を諸国に頒つ。	
	761	天平宝字5	諸国の国分尼寺に阿彌陀丈六像一尊、觀音菩薩像二体を造らせる。	
	780	宝龜11		伊治公世麻呂の反乱
	794	延暦13	平安京へ遷都	大地震が起きる。
	869	貞観11		国分寺の七重塔が落雷により焼失する。
平安	934	承平4		陸奥国分尼寺の修理を開始。
	1080	承暦4		
	1192	建久3	源頼朝、鎌倉に幕府を開く。	
鎌倉	1230	寛喜2		国分寺西院の僧名取新宮寺一切廃す。
江戸	1607	慶長12		陸奥国分寺薬師堂が完成する。

国分寺・国分尼寺関係年表

陸奥国分尼寺跡

陸奥国分尼寺跡は、仙台市若林区白萩町、宮城野区宮千代にあり、以前は原町大字南自学志波崎と呼ばれていました。昭和23年(1948)に、この一部が国史跡として指定されました。

国分尼寺は「法華滅罪之寺」が正式名称で、奈良の法華寺を総国分尼寺としています。「妙法蓮華經（法華経）」を根本の経典とし、この経典は女性の救済の道を示していると言われています。

経文には、観音菩薩をとなえれば風水害や暴力などの七難をのがれ、礼拝すれば容姿端麗な男児、上品優雅な女児を生むことができるといった内容が記されています。



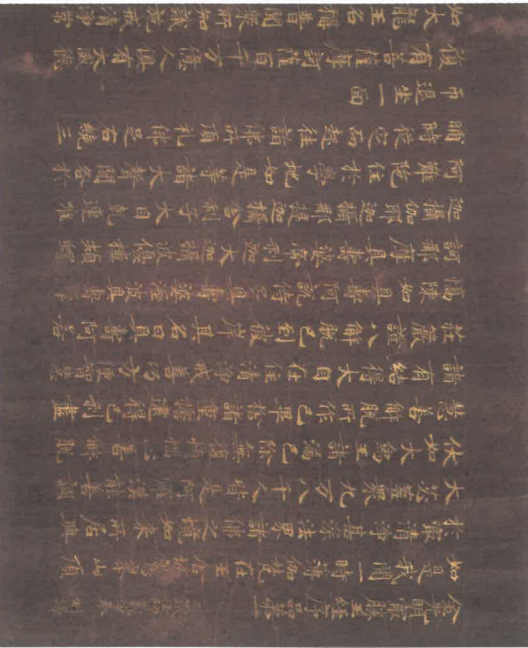
この地には「観音塚」と呼ばれる土壇があり、昭和39年(1964)の発掘調査（第1次）で礎石建ての金堂と推定されました。この金堂跡は正面が9.85m、奥行きが8.5mで、他の古代の寺院の金堂にくらべてかなり小さいものです。この金堂の北側では、道路の改修工事に伴う発掘調査で、掘立柱式の建物跡が見つかっています。東西に45mほどある細長い建物跡で、建物の中には間仕切りが入り、小部屋に仕切られています。このような構造の建物は僧侶が生活する僧房と考えられ、「尼房」と呼ばれます。さらにこの南からも大きな建物の跡が見つかっています。ちょうど道路の真下にあたります。この寺院の重要な建物になる可能性があります。また周囲には尼寺の活動を支えるための諸施設が広がっていたことも明らかになりつつあります。（下は尼房跡の柱穴の位置）



陸奥国分寺跡

陸奥国分寺跡は、仙台市若林区木ノ下二丁目から三丁目にあり、いにしえの宮城野の地に接し、標高16m程の平坦な土地に広がっています。奈良時代の天平13年(741)2月に聖武天皇が国分寺建立の詔を出し、国ごとに国分寺と国分尼寺をつくるよう命じました。日本は60余国に分かれていたので、120余りの寺院が造られたのです。

国分寺は「金光明四天王護国之寺」が正式名称で、東大寺を総国分寺としています。国を擁護するため造られた寺です。「金光明最勝王経」を国分寺の塔に納めたと言われ、経文にはこのお経を読む国王は、四天王、弁財天などがその国土を擁護し、民衆を安穩にすることが出来るという内容が記されています。



柴紙金字金光明最勝王経唐の戰爭記で10巻からなる。備後国分寺に安置されていたものと言われている。（奈良国立博物館所蔵）



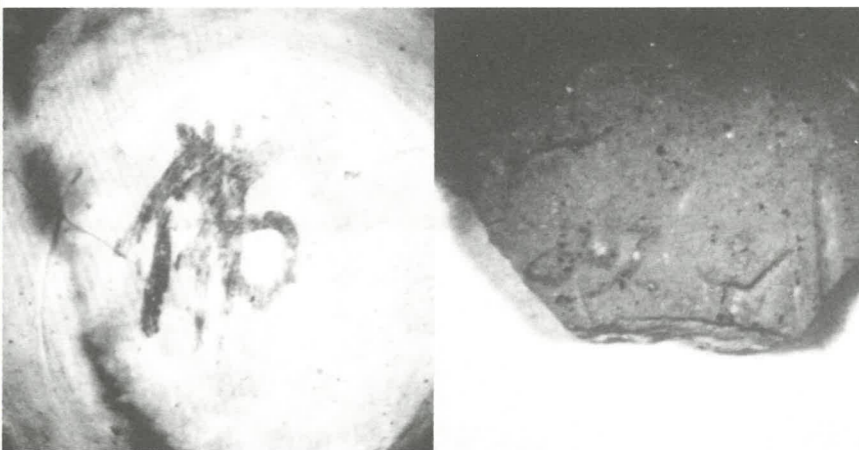
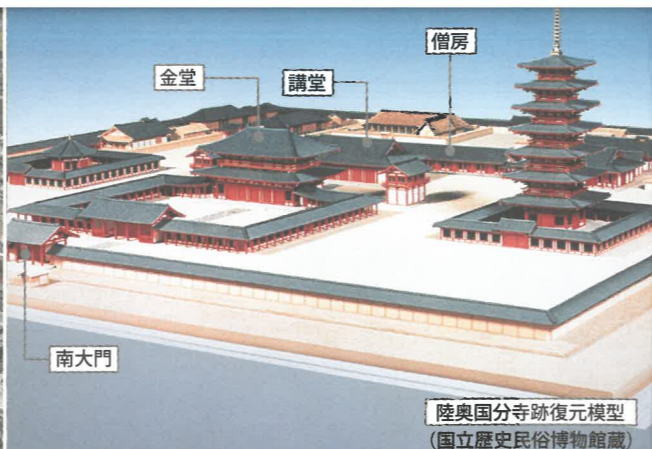
南大門跡の北に十二脚門があり、東西に廻廊が延びています。礎石の下部の根石のみが発見されました。現在は礎石があらたに設置され、門とそこから延びる廻廊の範囲が表示されています。

中門跡

現在の薬師堂仁王門の建っている場所に南大門が建っていました。昭和31年(1956)の発掘調査では、礎石建ちによる八脚門が推定されましたが、平成20年(2008)の調査により、東西19.5m、南北16mの基壇が発見され、想定されていた南大門より大きな門が建っていた可能性が出て来ました。



（現在この上に仁王門が建っている）



佛(仏) 妙
墨書土器とは、墨で文字が書かれている土器のことです。その土器の用途や使用されていた場所、所属を表していることがあります。この他に「坂」、「石」と「香」、「秦」、「鉦」という文字が書かれた可能性のある土器が見つかっています。



陸奥国分寺跡出土遺物
寺の屋根は瓦で葺かれていました。平瓦と丸瓦が交互に組み、軒先の部分に瓦を軒丸瓦、軒平瓦といい、先端には文様がつけられています。軒丸瓦では、蓮の華を表した重弁蓮華文や宝相華文、軒平瓦では、唐草の文様といわれている偏向唐草文や、珠文が連続する連珠文など、その文様によって名称がつけられています。鬼板は、棟の端に使われた板状の瓦です。鬼瓦とも呼ばれています。出土した瓦には、刻印が押されたものや、ヘラや指で文字がかかれたものがあります。瓦造りを注文した郡や豪族、瓦造りに従事した人々や窯の場所などが示されているようです。



江戸時代の初め、伊達政宗が慶長12年(1607)に陸奥国分寺を再興したのが現在の薬師堂です。この薬師堂を建立した場所が、陸奥国分寺跡の講堂の真上にあつたことが発掘調査でわかりました。薬師堂の建物は江戸初期の貴重な建造物として国の有形重要文化財に指定されています。仁王門は薬師堂と同じく建てられたのは明らかではありません。国分寺南大門の礎石を転用して、南大門の真上に八脚門を建立したものとみられますが、奈良時代の南大門より小規模の門となっています。この仁王門も薬師堂と同様、貴重な建造物として宮城県指定有形文化財となっています。

陸奥国分尼寺跡出土遺物
この時代の人々が生活で使用した土器には土師器と須恵器があります。土師器は紐状の粘土を積み上げて作り、屋外で焼かれ、東北で作られた土師器は、黒色処理といって、水もれしないように煤で処理されています。須恵器は、ロクロを使用し、窯を用いて高温で焼かれ、硬くて水もれが少ない土器です。土器類は用途や形状に応じて、坏(皿状のもの)や甕、壺などという名称がつけられています。